

# 果樹

水上瀧太郎

青空文庫



相原新吉夫婦が玉窓寺の離家を借りて入ったのは九月の末だった。残暑の酷しい年で、寺の境内は汗をかいたように、昼日中、いまだに油蟬の声を聞いた。

ふたりは、それまでは飯倉の烟草屋の二階に、一緒になって間もなくの、あんまり親しくするのも差しいような他人行儀の失せ切れない心持でくらししていた。ひとの家の室借をしていると、何かにつけて心づかいが多く、そのために夫婦の間に夫は妻に対し、妻は夫に対して、あたりまえ以上の遠慮があつた。

田舎の商業学校を卒業して、暫く役場に勤めていたけれど、将来の望もなく、もともとあととりの身の上ではなかつたから、東京に出て運をためて見ようという気になつて、新吉が故郷を出てから十二年になる。小学校では級長をつとめた事もあるし、商業学校でもいつも平均点は甲だつたから、もしも学資が豊かならば、大学まで行きたいのだったが、それは許されない望だつた。郷里の先輩で、相当の地位の役人をしているのに口をきいて貰つて、現在勤めている銀行の最下級の行員となつて、夜は神田の私立大学に通つた。東京に行きさえすれば、うで次第でどしどし偉くなれるように考えたり、級長だつたというだけの事で人に勝れているように思い込んでいたのなどは、夢よりもはかなく消えてしま

った。いい学校と悪い学校の区別もなく、大学という名前の魅力に誘われて、大したもののように想像していたところも、いたって無責任なものであった。三年間の夜学を卒おえて免状を貰った時も、これで明日から苦しいおもいをしず、銀行がひげさえすれば楽々と手足が延ばせるという安心があつたばかりだ。別に学力が増したとも考えられなかった。それでも銀行の方は人一倍真面目まじめにつとめ、おとなしい正直な事務員として上役にも目をかけられ、毎年三円五円と昇給して、僅わずかながらも貯金も出来た。いったいに辛抱しんぼうのいい方でその間六年間烟草屋の二階にいた。

朝は早く、夕方はきちんと帰り、夜遊よあそびなどは一度もした事がなかった。月々の雑誌を二三冊とつて、始めから終まで丹念に読むのが楽たのみのひとつで、日曜祭日にも郊外を散歩する位くらいがせきのやまだつた。烟草屋のお婆さんは、いかに新吉が真面目で勉強家で身持が正しいかを隣近所に吹聴ふいちようして廻つた。お婆さんには息子が一人あるのだが、或保ある険会社あの台湾支部に勤めていた。孫の顔も見られない寂しさから、新吉を我子わがこの様に可愛あがつた。新吉に妻を世話したのもお婆さんだつた。

おときはお婆さんの念仏友達ねんぶつともだちの、近所の菓子屋の隠居の遠縁の者の娘だつた。うちは日本橋の裏通のちいさな下駄屋で、女学校には三年まで通つたが、生意気になつては困ると

いう両親の意見で、学校をやめて大名華族の邸に行儀見習にやられた。十六の年から二十までつとめたが、病氣をして宿にさが下つてからずるずるになって、母親の手助をしていた。

菓子屋の隠居が何かのついでにおとぎの話をした時、烟草屋のお婆さんは直すぐに新吉と結びつけて考えた。最初のうちこそまだ早いとか、二人になつては暮しが楽でないとかうじうじしていたが、お婆さんが借りて来て見せた写真はまんざらでなく、みすみす断るのは惜おしい気がした。どうせ一度は貰うものならと云う氣になつて、案外手取てつとりばや早く話はきまつてしまつた。それを機会に一軒うちを持ちたいとも考えたが、先方でも当分は二階借で結構だといふので、そのまま烟草屋の二階の六畳に、不自由ながらも楽しい日を送る事になつた。それが今年の春の事だつた。

最初のうちはお婆さんも、自分のうちに嫁が来たようなもの珍しい喜びを感じたが、それは長くは続かなかつた。二階の二人が自分を邪魔わづらにしているという疑念ねんに煩わづらわされるようになった。

「うちの相原さんも先せんの頃とは変りましたよ。」  
などと近所の者にも告つげ口ぐちするようになった。

ほんとに新吉の生活も、以前とは少しは変つた。たまには二人で活動写真を見に行つた

り、新吉の銀行の帰りをおときが途中で待うけて、どこかで御飯を食べて来る事もあった。それがいちいちお婆さんの気に入らなかつた。

二階の二人も、室借の窮<sup>きゆうくつ</sup>屈に悩んでいた。殊<sup>こと</sup>に新吉は、六年間お婆さんの親切には心から感謝していたのに、俄<sup>にわか</sup>にいやな事ばかり目に立って、しみじみ他人の家の狭さを思い知つた。

それでも長い間世話になり、もともとおときと一緒になつたのもお婆さんのおかげなのだから、結婚して間もなく出て行くのは心がとがめていい出せなかつた。その点にかけてはおとぎの方は、さほど世話になつたと云<sup>かんがえ</sup>う考も深くはないので、どんな裏長屋でもいいから一軒構えたいと年中せがんでいた。せがまれると、おときを喜ばせたい心が強くなつて、新吉もいつそ思い切つてそうしようかとも思うのだが、生来のおとなしさと、人一倍義理や恩義には堅い方なので、愚<sup>ぐ</sup>図<sup>ぐ</sup>愚<sup>ぐ</sup>図<sup>ぐ</sup>に一日一日延びていた。

ところが幸いな事に、台湾に行つていたお婆さんの息子が突然本店詰になつて引<sup>ひきあげ</sup>上<sup>あげ</sup>て来る事になつた。いずれは別に一軒構える事になるかも知れないが、当分の間お婆さんと一緒に住むという事で、新吉夫婦はお婆さんのいやな顔を見ずに引越す事が出来るようになった。

いぎ探すとになると、貸家も思うようには見つからなかった。新聞の広告欄を見たり、周旋屋の前に貼出はりだしてある掲示に足をとどめたり、日曜には二人であてもなく山の手を歩いたりしたが、結局銀行の同僚が、白金しろがねの寺の離家があいていると教えてくれたので、夫婦で行って見てきめてしまった。

御寺は高台の崖に臨んだところにあつた。古川をさしはさむ町々を見下し、雑木ぞうきの多い麻布台あざぶだいと向あつていた。たいして大きな寺ではなかつたが、庭は広く、貸家の目的で建てた離家は、六畳と四畳半と三畳というささやかなもので、普請ふしんも粗末ひあたりだったが、日当ひあたりも風かぜとおし通とおしもよく、樹木や草花おびただの夥うえしく植うえてあるのを我わがものにして、夫婦二人きりの住居にはこの上もなく思われた。今までいた飯倉の烟草屋の二階では、障子しょうじをあけると目の下の神谷町かみやちようから西久保へかけて亜鉛草トタンぶきの屋根の照返しつまが強く、息の詰つまるおもいをしたのに比べると、籠かごから逃げた小鳥の気持きもちだった。他人まぜずの朝夕を迎えて、二人はほんとの夫婦の情愛を初めて知つた。

少しずつ所帯道具たのしを買う楽しみも深かつた。三田の縁日の晩に、予々かねがねほし欲しいと思つていた長火鉢ながひばちを買つた時は、新吉もおときもすっかり興奮して、帰途はお互に話す声も高くなり、人通ひととほの少いところでは固く手を握合にぎあつた。双方から感謝したい感激で胸がいっぱいだった。

次の日、新吉が銀行から帰ると、留守の間に届いていた長火鉢に鉄瓶をかけて、おときは赤坊に御湯をつかわせる母親のように、殆んど抱きかかえる形で、大事に大事に布巾をかかけていた。

二人にとつての苦手は、お寺の梵妻のしつっこい程口数の多い事だった。六十近い和尚と、先夫の子だという十六七の娘と、たった一人の弟子坊主を意のままに動かしているしつかり者で、自分の目から見れば世間馴ない夫婦を、指導してやろうとする心持が露骨だった。まだよそゆきらしい夫婦仲を、先輩が後輩にのぞむ態度で面白がっていた。

無口で羞しがりのおときは、まるつきり威圧されて、梵妻と顔を合せることを避けよう避けようと努めていた。昼間新吉の留守に、裏の井戸端で洗濯している時などは、向も退屈しきっているのので、下駄をつつかけて来ては側でおしやべりをしていた。和尚は門番の寺男と年中暮を打っているし、娘は女学校に通い、弟子坊主も四角い帽子をかぶって宗教大学に通っているのので、梵妻は話相手に飢えていた。諸式が高くなってお寺の経済の苦しい事、和尚がぼけてしまつて頼りにならない事、この前離家を借りた小学教員夫婦の悪口などを繰返してきかされるのはまだしもだったが、新吉夫婦にかかわる内輪の事を、根掘葉掘訊かれるのには、おときもよわり切っていた。いつ、どういふ風にしていつしよ



になつたかとか、新吉の月々の収入はどの位だとか、立入つた質問を受けると、おときは顔をあくくしてうなだれる外ほかに活路を見出せなかつた。

「あたしお寺の奥さんにはほんとに困つてしまうのよ。あなたの月給はいくらだなんて訊くんですもの。」

新吉が帰つて来ると、救われたように氣強くなつて、おときは昼間梵妻にしつつこく悩まされる事を訴えるのであつた。つい言葉に力が入り過ぎると、御寺の離家に住むのを厭いとうような口ぶりさえ漏もらした。

「そりやあひどいな。だけどその位の事は為しかた方がないよ。こんな借家は一寸ちよつとないぜ。僕は飯倉にいた時に比べると、頭脳あたまはやすまるし食欲は旺盛おうせいになるし、めきめき健康がよくなつたように思う。」

「そりやそうですね、だつてあんまりなんですもの。」

そうは云うものの、新吉と差さしむかい向むかひで晩飯を喰たべ、日がかげると俄にわかに涼しくなる頃の縁側で、虫の声の外には何の物音もしない広い庭から、崖の下の町に灯のともる景色を見ていると、湯治場とうじばにでも行つたようなゆたかな心持になる。

「銀行の連中で、こんな広い庭を持つてる人なんかありやあしない。先まず頭取と支配人だ

けだろう。僕は田舎に育つて、子供の時分植物や昆虫の興味を先生に吹込まれたが、久しぶりでこうしたところに住むと、樹や草を見るだけでも気が清々する。それにしても飯倉はひどかったからなあ。」

烟草屋の二階の窓に据えて置いた朝顔の鉢は、引越の時に持って来て縁先に置いたが、今では花もすがれてしまった。はかないその一鉢さえ、亜鉛屋根の景色を背景にしては、毎朝開く花の色に相当深い愛着を持ったのであった。

「あたしは騒々しい町の中で生れたので、木の名なんか何も知らないですよ。」  
「だって邸にいた時は、広い庭があったろう。」

「そりゃあ何千坪っていうんですから、広いには広いんですけれど、ただ立派な御庭だと思っただけでしたわ。よく御庭掃除のじいやさんが、あの松一本でも千円の値うちがあるなんて云ってましたけれど。」

「この御寺には珍しくいろんな樹がある。僕がひとつひとつ教えてやろうかな。」  
「ええ教えて頂だい。」

二人は縁側に並んで腰かけて、たそがれた庭に向っていた。

「あの門を入ると直ぐ右手の樹は知ってるだろう。」

「あれなら知ってるわ。ぎんなんの樹でしょう。」

「そんなら本堂の前のは。」

「さるすべり。」

「なかなか知ってるじゃないか。それではあすこに見える一番背の高いのは。」

「ああ。あの沢山鳥の来る樹ですね。わからないわ。」

「榎さ。」

すっかり夜になって、こおろぎの声のしげくなるまで、あきずに植物や虫や鳥の話をした。

新吉は、殆んど何も知らないと言つてもいいおとぎに対して、自分の知識の豊富なのが嬉しかった。おとぎにしても、何を訊いても知っている新吉が、たよりがあつて嬉しかった。

それがきつかけになって、新吉はいろいろの樹や草や鳥や虫の名を、おとぎに教えるのが楽みのひとつになった。寺の地面うちだけでも、松、杉、楓、銀杏などの外に、榎、榎、棕、橡、朴、槐などの大木にまじつて、桜、梅、桃、李、ゆすらうめ、栗、枇、柿などの、季節季節の花樹や果樹があつた。草花には萩、桔梗、菊、芒、鶏頭などの

秋のものの外に西洋種も多く、今はサルビヤが真紅に咲きほこっていた。

榎の高い梢には鶉が群って来た。銀杏のてっぺんで百舌の高啼く日もあった。竹むらにからまる鳥、瓜をつつきに来る鴉、縁側の上まで寄って来る雀、庭木の細かい枝をくぐる鶉や四十雀の姿も目に止った。

おときは新吉の指さす樹の枝に、可愛らしい小鳥の姿を見つけた時などは、声をあげて喜んだ。そういう事に喜ぶ自分というものを初めて知った。自分が喜ばば、夫が満足する事も一層嬉しかった。全く今まで知らなかった興味が、野原にも藪の中にもある事がわかった。

けれどもおとぎが弱ったのは虫の多い事だった。蚊帳の用意がなかったので、十月のなかばまで難渋した。蚊ばかりではない。名も知らない虫が、あかりを慕って来る。蝶々蛾の類に属するもの、うんか、かまきり、金ぶんぶんなどはおとぎの顔にぶつかったり、髪にとまる事もあった。仰山な声を立て顔色を変えて逃廻ったが、新吉は平気で指でつまんで縁側から捨てた。彼は決して殺さなかつた。

「虫なんてそんなに怖いものじゃあない。よく見てごらん。みんな素晴らしく巧妙に出来ている。僕なんか、可愛らしくて堪らないな。小鳥だの金魚だの、ああいうものを可愛がる

のと同じように、こんなちいさな虫も可愛らしいと思う。」

そう云つて、吹けば飛ぶような虫を手の平に乗せて、長い間見ている事もあった。羽を微妙に震ふるわせたり、脚を擦すり合せたり、目玉をくるくる動かしているのを、新吉はおときにも見せて面白がった。

「いくらあなただつて、かまきりは憎らしいでしょ。」

「あいつはいい奴だよ。大きな時代遅れの武器を持って威張いばっているくせに、どこかにひょうきんなどころがある。虫でいやなものは先まずないなあ。」

「あらいやだ。あたし蛇を見るとぞつとするわ。」

「蛇は綺麗きれいだ。地面を火の波のようにならねって行くところなんか、人間のダンスなんかより余程いいや。」

「あなたつて変な方ねえ。」

おときは全く理解出来ないように云つたが、心の中では夫の何事にも細かい観察を忘れないで、面白味おもしろみを見出すのは広い心の故ゆえだと思つて感心した。

「相原は不思議なんで御座いますよ。植木だの草花が好きなのはわかっていますけれど、ちいさな虫まで可愛がつて決して殺すような事は致しませんの。」

いつも向うから話かけられて、うけこたえばかりしているおときもひそかに自分の夫をほこる心持をまじえて梵妻に話した。

「蝶々や蜻蛉とんぼならよござんすけれど、蛇だの百足むかでだの金ぶんぶんまでお友達かなんかのよ  
うに思っているんですもの。」

「まあ蛇ですつて。いやだいやだ、あたしなんか聞いただけでもぞつとしますよ。」

梵妻はうすい眉毛まゆげを寄せて、おびえた表情をして見せた。それがおときに、ひどく勝ほこつた気持を与えた。

「いただくものにしても、お魚や肉よりも野菜の方が好きですし、お菓子なんぞには手も出しませんが、果物は好物でしてねえ、自分は山家やまがそだち育だから、なんでも土に近いものが好きだなんて申しておりますの。」

新吉にきいて初めて知った樹や草の名前を口にしたたり、指ゆびさして示す時は、すくなからず得意だった。

十月もなかばを過ると、落葉の早い碧梧桐あおぎり、朴、桜などは殆んど散ちり尽し、外の樹木も枝がうすくなつて、透いて見える秋の空がくつきりと高かった。

夫婦が借ている離家の前の、黄ばみ始めた雑木にまじつて、見事な柿の木が一本あった。

鈍重な感じのする大きな厚い葉に、夏中は日光が鋭く照返したが、今はその葉も艶と光を失つて、黄色く乾いたのは力なく土に落ち始めた。そのかわり葉かげにかくれていた柿の実は色づいて、枝は重さを支え兼るように撓んで来た。

「あの柿の実が毎日赤くなつて行くのを楽しみにしてしましてねえ、朝雨戸をあけると、きつと縁側に立つて見ておりますの。」

故郷の家の背戸によく生る柿の木があつたので、目の前に柿の実の赤らんで行くのを見ていると、子供の頃の事まで思い出すと云つて、新吉は朝日に光る梢をなつかしそうに仰ぎ見ていた。おときはその柿の木を指さして、この寺内に果樹の多い事が、いかに自分達夫婦の心を楽しくさせるかを梵妻に話した。

「へええ、相原さんはそんなにも植木が御好きなんですか。それでもあの柿は見かけばかりで渋柿なんですよ。」

梵妻も、西日にてらてら光っている柿の実の鈴生りに生っている梢を見上た。

「まあ、あんなに大きな見事な柿が渋いんですか。」

あれ程赤く熟したのが渋いとは全く思いもかけなかつたので、おときは何のわだかまりもなく目をみはつた。

「ええほんとに見かけ倒しなんですよ。渋いの渋くないのって。」

「おやおや、それじゃあ喰べられないのですか。」

「喰べられるもんですかね。」

梵妻は現在口の中が渋くて堪らなそうに、大きな先の太い鼻を中心にして顔中をしかめた。その様子が真に迫っていると云って、おときは背中を車海老くるまえびのようにして笑った。

その日新吉が帰って来て、差向で楽しい食事をした後で、いつもの通り縁側に蒲団ふとんを並べて茶を飲みながら、おときは庭前の柿が渋柿だという事を伝えた。

「そうかしら、僕はそうは思わなかったがなあ。」

新吉は腑ふに落ちない様子で、暮残る空に柿の実のつぶつぶ数えられるのを見上げて、首を傾けた。

「だって今日の御昼、お寺の奥さんがそう云っていましたもの。あの人ったら、こんな顔をして、ほんとおかしかったわ。」

おときは梵妻がして見せた渋い顔を真似まねして、自分でおかしくなって吹出してしまった。柿の実は、その葉が黄色く枯れて散れば散る程赤さを増して、晩秋の空に、いかにも日本特有らしい風情ふせいを見せていた。新吉は、それが渋柿だろうとなかろうと、何のかわりも



なく、晴れた日の空の色と、ちつとも曇くもりのない柿の実の光と、脱俗した枝ぶりとを愛した。

寺の門の外の往来からも、その梢の赤い実は、土塀を越えて見えた。近所の空地に集る子供達の冒険と欲張とのまじったいたはずら本能は、そのために刺戟しげきされたものと見えて、真まつびるま

昼間、ひっそりした寺内の様子をうかがって、鼬いたち鼠のように注意深い目を四方にくぼりながら、竹竿を持って忍び込んで来た。石を投るもの、竹竿で叩き落そうとするもの、みんなが狡猾こうかつな顔つきをして、緊張した手足を迅速しんそくに動かしていた。寺の者は気がつかなかったが、縁近い日あたりで縫物をしていたおときは、子供達の狼藉ろうぜきをいちやく認めた。

「そんな事しちやあいけませんよ。」

相手は小学生だとは思っても、それだけというのがせいっぱいだった。いってしまつてから、自分の顔のあかくなるのを感じた。不意に声をかけられたので、子供は一斉にふりかえつて、一時は一寸ちよつとためらつたが、おときの氣勢を見て取ると、相手によって現金に変る子供特有の凶太さで、平気で又また竹竿を振廻した。実際の重量よりも重たい響を立てて、真赤な柿が土に落ちる。

「かまうもんかい。」

「やれやれ。」

流石さすがに声はひそめながら、お互そそのに唆かしあつて、ばらばら石つぶてを打つ者もあつた。おときは膝の上の物を畳に置いて、縁側まで出て行つた。

「およしなさいつたら、叱られますよ。」

一生懸命でもう一度声をかけたが、何の甲斐かひもなかった。子供達の素振そぶりには、馬鹿にし切つている色が明あきらかだつた。

「あんたがたそんなものどつたつて喰べられやしないのよ。渋柿ですとき。」

「うそだい、喰べらあ。」

一人の奴やつふところは懐に盗んでしまつてあつたのを取り出して、いきなりがぶりとかじりついた。

おときは自分の意気地いけぢのないのをなさけなく思いながら、途方にくれて、子供達の暴虐に枝をふるわせている柿の木を、いたいたしく眺めていた。相手は大人には違ちがいないが、声も顔つきも優しい女なので、いたずらつ兎こはすっかり呑んでかかつていた。咎とがめる人の目の前で平気で柿を叩き落してやるのが、自分達の勇氣を示す事のように痛快に思われた。何のはばかりもなく、かけ声をして、柿の枝をばさばさ打つた。

「こら、何をする。」

突然庫裏くりの方から、声を震わせて梵妻だいくくが現われた。手に鍬くわの柄えのような堅い棒を持ち、肥ふとった体を不恰好ぶかつこうに波うたせ、血相かえて来た。その勢いきおいにすっかり脅おびえて、子供達は干ひ潟がたの寄居虫よどかりのようにあわてて逃出した。

梵妻はどこまでも追かけて行つたが、子供の方が素早く、たちまち門の外にちりぢりに散つてしまった。

「鬼婆あ。」

「とつたぞ、とつたぞ、柿六つ。」

塀の外でふしをつけてはやした奴があつた。

「とつたぞとつたぞ柿八つ。」

今度は獲物の数をふやして、二三人声を合せてからかった。その合唱をしつつこく繰返しながら、子供達は遠くへ逃げて行つてしまった。

「畜生、育ちの悪いがきつたらありやしない。」

未練らしく往来の方を振かえりふりかえり、せいせい呼吸をはずませて、梵妻だいくくは漸ようやく戻つて来た。

「まあこんなに荒して行つてさ。」

柿の木の下に立つて、落散つた枝や葉を忌々しそうに見ながら、ぶつぶつ云つて居るのが、おときにとつては自分の監督不行届を叱られているように感じられた。いったん部屋の中に入って、障子もしめてしまおうかと思つた程だったのが、殊更縁側へ出て、自分の方から声をかけないでは済まされなくなった。

「ほんとにひどいんですよ。いくらあたしがいたずらしてはいけないって云つてもきかないんですもの。」

「そんなこつてきくもんですかね。今度来たらひっぱたいやるから。」  
いつまでも、寂しくなつた木の梢を見上げて、誰にでも当りちらしたい肚の中をあからさまに、きびしい事を云うのであつた。

「子供つて為方のないものですねえ。あたしがそれは渋柿だから、取つたつて喰べられやしないって云つたんですけれど、がりがりかじつて見せたりして。」

おときはいいわけがましく、気の弱い事を繰返して、心の中ではなさげなく思った。

新吉が帰つて来ると、待構えていて、その日の出来事を話した。

「だって、いかにもあたしが意気地がないから柿を盗られたんだって云うような口ぶりなんですもの。あの梵妻さんも随分だわ。」

味方を得た嬉しきで、しきりに自分の弁護と、梵妻のどぎつい態度を非難した。ふだんはお寺の奥さんと呼んでいたのが、梵妻さんだの梵妻だのと云った。

「子供は為方がないなあ、すっかり葉の落尽した骨のような枝のさきに、熟し切ったあかい奴の鈴生りになつている景色が秋の風情なんだがなあ。」

あくまでも自分の目を楽しませ、心をなぐさめるものとして、なつかしがっていたのだから、子供の暴虐のあとを、わざわざ庭に出て見届けて来た。

「なあに、それ程の事はないよ。たかが五つか六つ落されただけだろう。」  
 さも安心したらしい様子で家の中へ引返して来た。

「渋柿なんか少し位とられたつていいじゃありませんかねえ。」

梵妻の態度がいつまでも心に残つていて、楽しい食事の間にも、おときは口惜くやしがつていた。

その頃、おときは初めて自分の体にただならぬ変化の起おきた事に気がついた。末の妹の生れる時、産さん褥じよくで母のあさましく苦むくるしのを見たり、その後もひよわくて年中両親に心配ばかりかけているその子の事を思うと心配だった。何という事もなく、夫に大きな負担をおわせてしまったような気がして、済まないと思うと、いい出し悪にくかつた。それでも黙

つてもいられないで、

「あたし、子供が出来たのかと思うの。済みませんが……」

と夫の顔色をうかがいながら切出すと新吉は上機嫌で、

「済みませんとは何の事だい。僕は子供は大好きだ。」

と云つてさも面白そうにおとぎの言葉を笑った。そうきくと、おとぎは自分の体内に夫の愛情が形になって宿つたような気持がして、俄かに我身がいとしくなった。

「あなたに似て利巧だといいわねえ。」

などと云つて、心から楽しみに思うようになった。夜が寒くなつて、たださえ人肌の恋しい頃、妻がただならぬ体になつたという事が、夫婦の仲を一層こまやかにした。

子供達が最初に柿を盗みに来てから四五日しかたたないのに、二度目の冒険を企てて、又<sup>また</sup>忍び込んだ。その時は幸いに、いつもは裏の墓地で草をむしっている門番のじいやがたまたま追払つた。急をきいて駆けつけた梵妻は、又してもおとぎの耳の痛くなるような声を張<sup>はりあげ</sup>上<sup>のし</sup>て、いたずらつこを罵つた。自分の心持からも多少神経質になつておとぎは、それをひどく気にした。

「あなたみたように眺めて楽しむ気もないくせに、どうしてあんなに惜<sup>おし</sup>いのでしょうか。渋く

て洗くて喰べられないっていうのに。」

たかだか柿を盗みに来る子供のいたずらに、和尚も弟子坊主も娘も寺男も呼集めて、いきり立つ梵妻を、おかしがるだけの余裕はなく、自分自身が罵られたように忌々しかつた。誰も知らないうちに、子供達がみんなとっつてしまえばいいなどと、腹の中では考えていた。

その日、寺の者は柿の木の下に集つて、しばらく評議していたが、やがて弟子坊主と寺男は梯子はしごをかついで来て、若い方が学生服のズボンにシャツという姿になって高い枝に登つた。下では梵妻と娘が莫塵ごごの四隅を持ち、上からちぎつて落す柿を受けていた。老僧も監督するような形で、懐ふところ手てをしながら日向ひなたに立つて眺めていた。

おときはかかりあいになるのを惧おそれて、障子の中で針仕事をしながら、時々隙間からのぞいて見た。余程たつて、何かやがや話しながらみんなの足音が入いりまじつて庫裏くりの方へ引上て行つた後で、障子をあけて縁側に出て見たら、無数に赤く日に光っていたのが、ひとつ残らず、もぎとられていた。

銀行から帰つて来た新吉は、寺の門を入ると直すくに、柿の梢の荒らされたのに気が付いた。時が来て、熟し切つて土に落たのとは違つて、人間の手が無理にもぎとつたためか、一層

いたましく見えるのであった。

「どうしたんだろう、みんな柿をとっちゃったのかしら。」

出迎えたおとぎの顔を見るや否や、面白くない様子で訊いた。

「ええ、又子供達が荒らしに来たものですから、お寺の人が総出でとってしまったんです。

若い坊さんがてっぺんまで登って、枝なんか惜気おしげもなく折って下に落していました。」

いいつけ口をする時の早口で、おとぎは昼間の光景をつぶさに描写して見せた。

「渋をぬいて喰べる気かなあ。これからすっかり葉の落尽した眺めが何よりいいのだが、惜い事をしてしまったなあ。」

暮かかる縁側で、枝の折口の生々しく見える柿の木をいたいたしそうに、未練な事を云っていた。彼の心には、村中に柿の木が沢山あって、秋の今頃の美しい故郷の景色が、絵よりも鮮あざやかに映って来た。

その郷里の家からは、烟草屋の二階に室借をしていた独身時代にも、時々林檎りんごや柿を寄越こしてくれたが、今年こは初茸はつたけと湿地茸しめじだけを送って来た。きのこを炊たきこ込んだ御飯は、新吉が子供の頃の好物だったと嫂あによめが代筆した母の言葉を書添えてあった。

「まあ、あたし初茸御飯なんて初めてですわ。どんなでしょう。松茸ならおいしいと思ひ



ますけれど。今晚直すくに炊いて見ましようか。」

粗い竹籠の中からあふれるように出て来たのを手にのせて、おときは珍しそうに見ていた。十一月の初めの、時雨しぐれの降った後の寒い日であった。たきませの御飯かおりごとの香は殊になつかしく思われた。

「そりやあ松茸のようにうまくはないさ。くの方にはそんな上等なものはありません。初茸飯か、久しぶりで田舎に帰ったような気がする。御豆腐おとうふの御つゆがほしいな。」

新吉には、いかにも晩の食卓が楽みらしく、勤に出て行くにも張合はりあいのある姿だった。おときはそれが嬉しかった。格子の外に出て、鋪しきいし石の上に靴の音が聞えたが、新吉は又戻って来た。

「あの初茸だの湿地茸ねえ、随分沢山あるから御寺の人にも分けてやろうじゃあないか。くにから来たものですって。」

わざわぎ云いに来て、おときのうなずくを見て行つた。

夕方新吉は、

「ああ今日程忙しい事はなかった。すっかり疲れて御腹おなかも減ってしまった。初茸御飯が待遠しいな。」

靴を脱ぐ間もそんな事を云つていたが、そう直ぐとはいかないときくと、手拭をさげ  
て湯に出かけた。

めつきり日脚も短くなり、かなり遠い湯屋から帰つて来る道では、湯上でも肌寒く感  
じるようになった。昼間仕事のたてこんだために、すっかりくたびれたのが、湯に入つて  
一層空腹を感じた。宵闇の中を歩きながら、埒に騒ぐ鳥の声を聞いて、この季節に著し  
く感じる澄んだ寂しさが腹の底まで沁みるのを知った。うちのあかりの障子に映るのを見  
た時は、新吉の心は喜びに震えるようだった。

あつたかい初茸飯の湯気の立つのをふうふう吹きながら、故郷の秋のあわただしく暮れ  
て、早い初雪が来て冬籠の季節となる頃を、涙ぐましい程なつかしく思い出した。

「あたし初めてですけれど、おいしいわねえ。」

おときも、初茸の淡い香、滑かなようでしやしきしやしきする歯ざわり、噛みしめるとどこ  
かに土のつめたさを含む味をほめた。

「今朝出がけにそう云つた通り、お寺の人にも分けてやったかい。」

「ええ、御寺の奥さん大変喜んでいました。それでね、おうつりのしるしだって、柿を持  
つて来てくれましたよ。」

「柿。」

「それがおかしいんですよ。庭の柿なんですつて。あんなに渋い渋いと云っていたのにどうしたんでしょう。あたし達が盗るといけな<sup>と</sup>いでも思つて、そんな事を云つたんじやないでしようか。」

「そうかもしれない。」

「なんて憎らしいんでしょう。そんな事云わなくなつて盗りやしませんわね。」

ここに引越して来て以来、何べん梵妻の口ずから聞かされたかわからないのを思い出して、おときはしきりに忌々<sup>いまいま</sup>しがつた。

「ああ食つた食つた。久しぶりで実にうまかつた。初茸飯なんて田舎めかしいものを食うと、おやじやおふくろの顔が目に見えるような気がするなあ。」

番茶の焙じた香ば<sup>ほう</sup>しいのをすすりながら、新吉は満腹して重たい体をもてあつかうように、食卓にもたせかけ、おとぎの顔を見て笑つた。すべての事にみち足りた時、おのずから浮んで来る微笑だつた。

「あたしもほんとに頂けちゃつたわ。まぜごはんは食が進むと思つて、今日は余計に炊いたんですけれど、この通りですわ。」

おはちの蓋ふたをとつて傾けて見せると、中はからからになっていた。

台所でおときが食事のあとしまつをしている間に、新吉は縁側の雨戸をしめ、銀行の帰りに買つて来た夕刊を丹念に読んでいた。水底みなぞこのように冷つめたく青い月の夜で、庭の樹々は心あるものが強いて沈黙を守っているような静けさで、轟すくすく々と空に裸の枝を延ばしていた。その静けさは雨戸をしめ切つた室の内までも沁みて来た。

台所で水を流す音や、瀬戸物の触れあう音が耳に入ると、新吉は読んでいる新聞の記事が頭に入らなかつた。そこで働いているおときのお腹の中に子供が生育しつつかあるという事が、妙に頭にこびりついていた。一人の女が自分によって子供を生むという事が、不思議の念をまじえた期待で心の底をくすぐっていた。

「あなた、うたた寝なんかして風邪かぜを引きますよ。」

いつの間にかこくりこくりやつていたのをおときに起されて、新吉は嚏くしゃみをしながら身を起した。

「ほら御ごらんない、もう風邪を引いてしまつたんですよ。」

とたしなめて、長火鉢に炭をつぎながら、おときは眉をひそめた。

「今日はしんが疲れたんだなあ。こんな時は早寝にしよう。ほんとに風邪なんか引いては

馬鹿馬鹿しいや。」

「それがいいわ。夜はすっかり寒くなりましたからねえ。」

二人は長火鉢を両方からさしはさんで手をあつためた。何気ないふりをして、新吉は妻の柔い手に自分の手の甲をちよいちよい触れて見た。ほんの僅かな浮いた心が、ひっそりした秋の宵の澄んだ心境の表面にさざ波をたてた。

「あなた、柿めし上つて見ない。」

「お寺でくれたのかい。喰べて見ようか。」

「ほんとに渋くなかつたら、随分おかしいわねえ。」

おときはいそいそと台所に立つて行って、塗盆ぬりぼんの上に四つかせてある柿に庖丁を添えて持つて来た。艶々つやつやした果実の肌は、あかりの下にくもりのない色を光らせた。するするとおとぎの指輪の光る指の間から、細く長い皮が垂下たれさがつて、水気のある肉はあからさまになった。それを四つに切つて新吉にもすすめ、自分も口に入れた。渋い渋いときかされていたので、初めは用心深く歯をあてたが、直ぐに甘い汁が舌を浸した。

「どう？ ちつとも渋くはないわねえ。」

「うまいや。いい甘味だ。」

齒に沁みる冷い甘さを噛みしめながら、二人は笑をとりかわした。

「やっぱりあたし達が盗って喰べると思つて、わざと渋柿だなんて云つてたんですわねえ。」

馬鹿馬鹿しい梵妻の浅智恵を忌々しく思うのを通り越して、わだかまりのないおかしさを感じた。

「うまいなあ。」

それには返事をせずに、新吉は自分で庖丁をとつて別の一つをむき始めた。

四つの柿は、すっかり皮と種子になつてしまつた。二人の舌には果物のみが持つ清々<sup>すがすが</sup>しい味が残つていた。何の不満足もない瞬間だつた。妊娠しているという事実が心を喰<sup>そそ</sup>るためか、この頃妻の姿体が俄かに艶<sup>なまめ</sup>かしさを増して来たように思つていたが、今もその感じが鋭く襲つて来た。新吉は火鉢の上で、妻の両手を軽く握つた。火気のために掌は直ぐに汗ばんだが、霜の多そうな夜で背中や膝はつめたかつた。

崖の下の町の方で、しきりに犬が吠えていたが、それが聞えなくなると、しんとした雨戸に月の迫るのを感じるばかりだつた。どこで啼<sup>な</sup>くのか、風邪を引いているような蟋<sup>こおろぎ</sup>蟀<sup>せむし</sup>の聲が聞えた。いつもこの室に並べて敷く二つの蒲団を、ひとつにしたいような夜であつ

た。新吉があくびをすると、おときも、つい誘われて、なるべく口を大きくはあくまいとつとめながら、とうとう堪えきれなかった。目のふちをあかくしながら、夫の顔を見て首をかしげて微笑した。





# 青空文庫情報

底本：「銀座復興 他三篇」岩波文庫、岩波書店

2012（平成24）年3月16日第1刷発行

底本の親本：「水上瀧太郎全集 第五卷」岩波書店

1941（昭和16）年1月20日

初出：「中央公論 十二月号」

1925（大正14）年11月8日

入力：酒井裕二

校正：noriko saito

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 果樹

水上瀧太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>